第二十七回「全日本中学生水の作文コンクール」入賞作文集

水について考える

主催　国土交通省・都道府県
後援　文部科学省・全日本中学校長会
　　水の週間実行委員会
　　独立行政法人　水資源機構

ごあいさつ

国土交通大臣　北側一雄

地球上のすべての生命体は、水によって育まれてきました。水は人間や動植物が生きていく上で、欠かすことのできない貴重な資源です。しかし、私たちが利用することのできる水は、地球の表面を覆っている水のほんのわずかな部分に過ぎません。この貴重な水は、太陽エネルギーにより蒸発し、雲に姿を変えた後、雨や雪となって地上に降り注ぎます。そして、地表に降った雨や雪は、地中へ浸透し地下水となったり、あるいは河川の流れとなって、上流から海へと至る循環を繰り返しています。私たちは、循環の過程の中において様々な形で水を利用し、使った水を再び循環系に戻しています。この水の循環を健全な状態に保つことが、今日の私たちにとって極めて重要な課題となっています。

国土交通省は、水の重要性に対する国民の関心が高まり、理解が深まるきっかけとなるよう、昭和五十二年から「水の日」と「水の週間」を定め、様々な行事を行っており、この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和五十四年からこの行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいは両親や先生から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

今年は、第二十七回を迎え、全国（海外を含む）の中学生から一五，七二六編（学校数四三九校）もの応募がありました。応募された作文は、日常生活における水の貴重さや大切さを表現したもの、身近な体験から美しく豊かな水を未来に伝えていくために私たちがなすべきことを表現したものなど、水を大切にしていこうとする中学生の皆さんの気持ちがよく表現されており、深い感動を覚えました。このたび、入賞作品三十二編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校や家庭において「水」について考えるきっかけになるよう願っています。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、また御多忙のところ御審査をいただきました審査委員の先生方に厚く御礼申し上げますとともに、御協力をいただきました都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝を申し上げまして、ごあいさつといたします。

平成十七年十月

「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日
閣　議　了　解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年８月１日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水の需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年８月１日「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるため諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することとしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている８月の上旬が適当であるので、その初日である８月１日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

目次

最優秀賞（一編）

（国土交通大臣賞）水害ボランティアから学んだ〝もったいない〟の精神……滋賀県守山市立守山中学校二年……髙橋　渉……2

優秀賞（四編）

（全日本中学校長会会長賞）みずみちのある幸せ……静岡県静岡大学教育学部附属島田中学校二年……横田川　弥里……4
（水の週間実行委員会会長賞）水を大切にする心……福島県福島市立北信中学校三年……菅野　仁紀……6
（独立行政法人水資源機構理事長賞）大好きな宇内川……山口県下関市立豊田西中学校二年……新谷　豪……8
（国土交通省水資源部長賞）断水一時間……秋田県大仙市立西仙北東中学校二年……須藤　嶺……10

入選（二十七編）

北海道岩見沢市立上幌向中学校三年……黒澤　萌……12
北海道厚田村立厚田中学校三年……小武　真鈴……13
岩手県軽米町立小軽米中学校二年……山田　明美……14
秋田県大潟村立大潟中学校二年……宮川　紀元……15
福島県郡山市立緑ケ丘中学校三年……増子　恵美……16
栃木県作新学院中等部二年……林田　翔……17
群馬県群馬大学教育学部附属中学校三年……石内　崇勝……18
千葉県白浜町立白浜中学校三年……佐野　あずさ……19
神奈川県小田原市立城山中学校二年……鈴木　亜里沙……20
富山県氷見市立南部中学校三年……宇波　由里菜……21
山梨県駿台甲府中学校二年……椙村　光貴……22
山梨県駿台甲府中学校二年……河西　真瑠那……23
岐阜県大垣市立赤坂中学校二年……長澤　奈央……24
岐阜県岐阜市立伊奈波中学校二年……渡邊　千裕……25
兵庫県三木学園白陵中学校三年……北口　千裕……26
山口県周防大島町立大島中学校二年……藤井　絢子……27
山口県下関市立豊田西中学校三年……肥中　優実……28
徳島県美馬市立穴吹中学校二年……村上　睦実……29
愛媛県今治明徳中学校二年……三宅川　和賀子……30
長崎県佐々町立佐々中学校一年……南部　由梨絵……31
熊本県倉岳町立倉岳中学校三年……森田　大介……32
宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校一年……神田　貴央……33
鹿児島県三島村立三島中学校三年……小野原　三誉……34
鹿児島県垂水市立大野中学校三年……迫田　和……35
沖縄県平良市立北中学校三年……友利　翔耶……36
沖縄県石垣市立名蔵中学校二年……狩俣　雅代……37
ドイツハンブルグ日本人学校中学部二年……藤田　絢子……38
第二十七回「全日本中学生水の作文コンクール」ポスター……39
第二十七回「全日本中学生水の作文コンクール」概要……40
第二十七回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿……42
第二十七回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況……43
「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移……44
第二十七回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式……45

最優秀賞（国土交通大臣賞）

「水害ボランティアから学んだ〝もったいない〟の精神」

滋賀県　守山市立守山中学校
二年　髙橋　渉

「あぁ、もったいない。もっと大事に使いやぁー。」

と大きな声が響いた。これは、昨年の夏、福井県を襲った豪雨災害でボランティアに参加した時、母に言われた言葉だ。私は母や弟と共に、美山中学校の近くにある、郷土資料館で、床板についた泥を落としていた。いつもの調子で車を洗うような感覚でバケツの水をざぶざぶ使っていた。そんな私の無駄な水の使い方を母に注意されたのだった。そう言われて周りを見わたしてみると、私と同い年ぐらいの現地の中学生が、大きなゴミバケツいっぱいに汲んだ水を台車に乗せて一つひとつ大事そうに作業場へと運んでいた。バケツの中の水は茶色く濁っている。現地では、豪雨災害の為に、貯水そうが土砂で埋まり、町内の水道は全く使えなくなっていたのだった。使える水と言えば、わずかな井戸水だったが、蛇口から出てくる水は、細く濁っていた。私は自分が「水を自由に使えない世界」にいることにその時初めて気付いた。空からいやというほど雨が降ってきたにも関わらず、今度は水が足りないなんて、思いもよらなかった。郷土資料館では、床板を洗うのに、水を大量に使えないので、高圧の噴霧器などを使ってできるだけ水を使わなくて済むように工夫した。

翌日、ボランティアに伺った個人のお宅では、家財道具を洗うのに川の水を使った。その水もまた、土砂の影響で茶色く濁っていて、泥を完全に洗い流すことはできなかった。水を使いたいのに使えない。そんな状況を体験して初めて、水の大切さが身にしみた。

先日、母が私に言った言葉である、「もったいない」が、世界共通語になりつつあることをニュースで知った。この「もったいない」を世界に広げたのは、環境活動家であり、ケニアの副環境相でもあるワンガリ・マータイさんだ。マータイさんは、「グリーンベルト運動」をつくり植林をすることで、ケニアの荒廃した土地を豊かにし、この活動

を通して女性の自立や地位の向上を目指した人だ。この功績が称えられ、二〇〇四年にノーベル平和賞を受賞している。

「日本には、すばらしい習慣がある。」

マータイさんは、地球環境の大切さを訴える中で、たった一言で自分の環境に対する思いを言い尽くす「もったいない」という言葉に心を動かされたと話している。この「もったいない」という言葉を辞書で調べてみると、「もっと有意義な使途が有ると思われるので、現在の無駄な扱い方が惜しまれる様子」と書いてあった。この「もったいない」の精神は、水環境にも大いに共通するところがあると思う。水は限りある資源で人間が創り出せるものではない。また、水は人間だけではなく、全ての動植物の営みに必要なものだから、もっと大切に使わなければいけない。そのために、私たち一人ひとりが身近で実践しやすいことから水を大切に使う工夫をすることが重要だと思う。最近、我が家では、洗たく機を買い替えたが、風呂の残り湯を汲み上げるポンプが付属品としてついてきた。これを使えば毎日洗たく一回分の水の節約になる。他にも歯をみがく時や、顔を洗うときに水を出しっぱなしにしない、食器についた油汚れは紙で拭いてから洗うなど、私たちの身の周りで、水を大切に使う工夫はいくらでもできると思う。

私は、今回のボランティア体験を通して、水の大切さが身にしみた。また、絶妙のタイミングで「もったいない」という言葉の本当の意味をマータイさんに教えてもらった。これからは、この「もったいない」の精神を忘れずに、「もったいない」の本当の意味をいつも頭の片隅に置きながら、私なりの方法で水を大切に使う努力をしていきたいと思う。

優秀賞（全日本中学校長会会長賞）

「みずみちのある幸せ」

静岡県　静岡大学教育学部附属島田中学校
二年　横田川　弥　里

北は山、南に大井川。その間にはさまれたお茶とみかんの里、それが私の住む神座（かんざ）です。「中途半端な田舎」だけど、生活にぴったり添った、優しい自然に包まれている所で、一番の自慢は、村のあちこちに湧き井戸があること。本当にきれいな湧き水なのです。掘り井戸と違って浅いため危なくないので、小さいころ、私はよくそこで遊びました。よそのお宅の井戸だけど、飼われている鯉にパンくずをあげたり、積み石の間から顔を出している赤いサワガニをつかまえたりと、長い時間遊んでいても、怒られたことはありませんでした。

――なぜ私のうちには湧き井戸がないの？

――それは、「水道（みずみち）」が通っていないから。

そう教えてくれたのは、曽祖母でした。

「水道」と書いて「みずみち」と読む。今年八十九才になる曽祖母がよく使う言葉です。その時幼稚園児だった私には、初めて聞く言葉でした。これには、字のごとく「水の通る道」という意味と、「水脈」という二つの意味があり、曽祖母の使う「みずみち」は後者、つまり地下水のことをさしています。

そうです。井戸の水を、曽祖母はいつも気にかけて生きてきたのでした。

私の家には、坂の下に掘り井戸があります。今ではモーターで汲み上げて、蛇口をひねれば水が出るようになっていますが、家で使っている水のほとんどは、市の水道の水です。

曽祖母がこの家にお嫁にきた七十年前にはもちろん水道（すいどう）などはなく、坂の下の井戸から汲んだ水を台所の水がめにためて炊事に使っていたそうで、その水汲みは、新嫁っこの曽祖母の大切な仕事でした。曽祖母は体が小柄なので、重い水汲みの往復にはとても苦労したそうです。おまけにこの井戸が、ションベン井戸と家の者にも皮肉を言わ

れるような水量のない井戸だったので、水を汲み上げること自体が重労働だったと話してくれました。

「それがある時、みずみちが変わって、家の井戸に水がたくさん寄るようになってね。その上、家の衆がお台所へ沢の水を引いてくれてさ。今の水道みたいに、さあさあいつも水が出てる有様は、夢を見てるみたいだった。」

更に、外の洗い場にも沢からの水をまわしてくれたおかげで、生活は格段に楽になったそうです。その洗い場も一の井戸、二の井戸と呼んで、最初の水だまりでは野菜洗いや洗濯を、次の水だまりで汚れた鍬や鋤を洗い川に流す、最後まで大切に水を使ったのだとか。

「酢屋段（私の家より高台にある一帯の呼び名）では、山の沢から水を引いてるんだよ。」

その山の水は、降水量が極端に少なくて全国的に水不足が叫ばれた数年前も、枯れることなく湧いていたので、酢屋段の分家のおじいさんを大いに驚かせたそうです。そのおじいさんが言うには、「水が切れないのは、自分が子供のころ植えた山の木が大きく育ったからだ。たくさんの木がしっかり土に根を張り、たっぷり水を抱えこんでくれたおかげだ。」と。畑だけではなく、山にも入って仕事をしてきた人らしい言葉だと思いました。

曽祖母は、水道が普及した今でも、神座の山手の高台では山（沢）の湧き水を、大井川沿いの平地部では大井川の伏流水（掘り井戸）を、市の水道よりたくさん使っている家が多いことを教えてくれました。

神座は、表層水、地下水どちらにも恵まれた、まさに「みずみち」のある里です。後ろに豊かな山、前に大井川、そしてゆっくりと自然を育んできたはるかな時間、これらがあったからこそ得られた「みずみち」なのです。

私は、曽祖母をはじめとする先人たちの話などから、水を得る為にしなければならなかった多大な苦労を知り、水を無駄なく使う知恵と姿勢を学び、大切に守り続けていく心を引き継ぎました。中途半端な田舎だからこそできる、人と自然がうまく共生していける穏やかな発展を、私たちは神座でしていきたいです。

優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）

「水を大切にする心」

福島県　福島市立北信中学校
三年　菅　野　仁　紀

「なんだこれ」

マレーシアのホテルで友人が大声をあげた。僕がすぐに飛んでいくと、黄色いお湯がはられたバスタブを見て友人が驚いて立っていた。

昨年の夏、僕はマレーシア、シンガポールへの海外派遣研修に参加した。その初日、ホテルでの出来事である。

事前研修では飲み水に注意するように、何度も言われていた。だから、飲み水はミネラルウォーターを飲んではいたが、水道から流れ出る水が全て黄色いのには正直驚いた。

もし、日本で水道管から黄色い水が流れ出るとしたら、それは水道工事の後のほんの少しの間だけ。またすぐに、透明で衛生的な水が各家庭に届くのが日本の常識なのだ。

ホームステイ先の家族もミネラルウォーターを飲んでいた。家族で水を大切にしている印象が強かった。僕も、毎日一本ずつ配られる五百ミリリットルのミネラルウォーターを少しずつ大切に飲んだ。日本でなら、水道の蛇口からいくらでも直接飲めるのに。日本では当たり前だったことが、本当はとても幸せなことなのだとつくづく感じさせられた。

マレーシアからシンガポールへ行く途中には、ジョホールバル水道の太いパイプが見えた。このパイプで、シンガポールはマレーシアから水を輸入しているのだ。シンガポールは国土面積は狭いが人口が多い。しかし、水を蓄える施設が少ないため、水をマレーシアやタイ等からの輸入に頼っているのだ。

「水を輸入？」

そんな国があることを僕は初めて知った。

ところが、帰国後ある資料を読んで、僕は驚くべき事実を知った。なんと今の日本は、水の輸入大国だったのだ。一年間に琵琶湖の二・

三倍分もの水を外国から輸入している。

それは、外国からの輸入品を生産するまでに使用した「見えない水」も輸入していると考えるからだ。水は農業に一番多く使われる。例えば、一キロの小麦を収穫するまでに二千リットル。食パン一枚では四十二リットルになる計算だ。日本の食糧自給率は約四十パーセント。残りの六十パーセントは外国からの輸入に頼り、その食料生産のために外国の水を日本人は使っていることになるのだ。

世界中にある全部の水をドラム缶一本とすれば、飲み水や農業に使える水はたったのスプーン二杯分。そして、それだけの水が全ての人に平等にいきわたるわけではない。

ＷＨＯが試算した、人間が人間らしく生きるために必要な水の量は一日五リットル。しかし、先進国はその百倍の一日五百リットルもの水を使っているそうだ。その一方で、アジアやアフリカ等では安全な水が手に入らず、病気になったり、食料不足になったり、水を奪い合う紛争が起きている。

日本は、一年の平均降雨量が世界平均の約二倍で、琵琶湖十五杯分もの雨が降る、水に恵まれた国である。

だから、今まで僕は、日本は水に関して外国に影響を与えることはないと考えていたし、水を大切にする意識も低かったと思う。

しかし、海外研修に行きアジアの国の水事情を知り、そして自分の豊かな生活が外国の水を使い成り立っていると考えると、世界の水問題を他人事と考えてはいけないと思った。

日本は水不足の国に対して、最新の技術や資金の援助を積極的に行い、安全な水を確保する義務があるように思う。そして、僕たち日本人は水の大切さをもっと意識すべきだ。

先進国である日本は「水を大切にする心」も先進国でなくてはならないのだから。

この四月に、福島市の茂庭地区に新しくできた「摺上川ダム」の試験湛水が満水となった。ダムの非常用洪水吐から溢れる滝のような水のカーテンが美しかった。豊かな緑の自然からあふれ出た水を貯えたダム。この美しい貴重な水を大切にしなければと僕は思った。

優秀賞（独立行政法人水資源機構理事長賞）

「大好きな宇内川」

山口県　下関市立豊田西中学校
二年　新谷　豪

僕が宇内川を好きになったのは、たくさんの発見があるからです。

僕たちが通った小学校を流れている宇内川には、ハヤやカニ、カメなど、小さな川でもたくさんの生き物が暮らしています。もしかしたら、まだまだ僕が見たことのない生き物もいるかもしれません。川に入ったときは足がキュウッとなるような冷たさを感じますが、魚たちを追いかけるうち、すぐにその冷たさは忘れています。

ある日、国語で「ビーバーのダム工事」を読みました。ビーバーのダム造りのノンフィクションです。そして友だち二人が宇内川にダムを造り始めました。それを知って僕はドキドキしました。すごいことが始まった！

それはまず川の真ん中にある大きな岩を中心にどんどん岩を積んでダムを造る計画です。それから僕たちの昼休みはとても楽しくなりました。日を追うごとに参加者は増え、最後には学年の全員がダム造りに夢中になっていました。完成したダムはとてもすごいものでした。先生もびっくりされたほどです。

そしてダムが完成して、僕は発見しました。ダムの水につかっている部分はカニのすみかになっていました。僕たちはカニが住みやすくなったのだとうれしかったです。ところが、ハヤたちはダムを造ったことで通り道がなくなって困っていました。慌てて道を作ってやりました。けれど、今度はダムが壊れやすくなってしまいました。さらに問題は起きました。道を作ったことで今度はカニたちが住みにくくなってしまったのです。ダムに作ったハヤの通り道は水の流れが速く、カニたちはそこに吸い込まれてしまうのです。よくしようと改築すればするほどダムには問題が出てきてしまいました。

問題は生き物に関わるものばかりだったので、僕たちはそれを詳しく調べるために宇内川にいる生き物を飼ってみることにしました。水

槽の中に色々な生き物を入れ、観察を始めました。

ハヤは飼い始めて二日で死んでしまいました。ハヤはたっぷりの水量で流れのある川でなくては生きられなかったのです。カニとカメはけんかをしない限り元気です。それがわかって、川にカメやカニの住む場所を作ってやろうとさっそく作業に取りかかりました。まずはどのくらいの面積をとるかを考え、石を集めて形を作ります。それをどんどん補強して、できあがりです。カニもカメも入れたとたんに隠れてしまいました。彼らには隠れる場所も必要なのです。隠れるときの動きはとてもかわいいです。

今振り返ってみると、自然はすごいとつくづく思います。あんなに多くの生き物を優しく育てているのですから。自然は上手くできています。僕たちが勝手にいじってはいけないものだったような気がします。

僕たちも川のおかげで生きています。水は飲み水になったり、洗濯に使われたり、僕たちの生活を支えます。ところが、誰もが知っているとおり、最近は大気汚染などの環境破壊とともに川の汚染が進んでいます。僕もこんなことじゃいけないと思います。ハヤやカメやカニと同じように、僕たち人間も川に生かされているのだから。

僕たちは川にお返しをすべきだと思います。川をきれいにする運動をしたり、ゴミのポイ捨てをしないようにするなど、少しの心がけでたくさんできることがあると思いませんか。僕もそのような心がけを実践したいと思っています。

僕は宇内川が好きです。釣りもできるし、川遊びも楽しめます。宇内川は僕たちにたくさんの思い出をくれました。これからもこの川を好きでいたいし、守っていきたいです。宇内川を大好きだと言ってくれる人が多くなったらいいなあ、と思います。

優秀賞（国土交通省水資源部長賞）

「断水一時間」

秋田県　大仙市立西仙北東中学校
二年　須藤　嶺

「おや、水でね。なしてだべ。」

夕方、祖母が、急に大きな声を上げた。僕は、母の居る台所に駆け込んだ。同時に、町内会のおばあさんが、断水を知らせに来てくださった。電話が鳴る。隣のおばさんからだった。えっ、断水？飯食えないの、トイレは、風呂は…。

「嶺、車庫の方の水はまだ出るから、これに水汲んできて。」

母が、ポリバケツを差し出した。蛇口をひねると、五ミリ位の細さの水がちょろちょろと出てきた。ピチッと水のはじける音。だんだん水が溜まってくると、中心部が、ＣＤのように丸くへこんでくるように見える。もっと水かさが増すと、ＣＤが消えて泡が生まれ、小さな一瞬のダンスをする。こんなに水をじっくり見たのは、初めてだった。

「ただ今、断水中です…。」

遠くで、広報車の声がする。本当に水が出なくなるんだな。これは大変だ。水が、力尽きてきたらしい。三ミリ、二ミリ、一ミリ、ポタ、ポタ、ポタ。もう一滴と励ましてみたが無理だった。重い大事な水を慎重に台所へ運ぶ。雨漏りではないけれど、鍋やボウルなどがにぎやかに並んでいた。

春休みの終わる頃、町村合併で町が市に生まれ変わった直後の出来事だった。貯水施設の故障が原因だったそうだ。ちょうど夕食時だったので、騒ぎが大きくなった。給水車も回ってきた。いつまで水が出ないのか、さすがに少し心配になってきた。

「手を洗うぞ。」

と父が、僕と兄を呼び、やかんの水を手にかけてくれた。うがいは、コップ一杯ずつだったが、あっという間に、やかんは空になった。水って結構気が付かない間に沢山使ってしまっているんだな。普段、水道では見えない水のかさを目の当たりにして、僕は驚いた。

母が夕食の準備をほとんど終えていたので、食事には困ることはなかった。割り箸を使った事、油っぽいドレッシングを禁止された事、食後に皿を重ねない事位だった。異変は、デザートの時に起こった。

「嶺、広告の紙持ってきてちょうだい。」

と、母に呼ばれた。幼稚園教諭の母は、紙の箱を作っていた。小学校の給食の時に、ごみ箱に使った事があった。手伝って作ってみると、紙が大きくて、思ったより難しかった。キッチンペーパーを中に敷き、イチゴとハッサクと伊予柑を入れて、父と兄の居る部屋へ持っていった。兄が笑う。

「うはぁ、珍しい皿。ｇｏｏｄ ｉｄｅａ！」

食べ終われば、包んでまとめて捨てるだけ。確かに水の節約にはなる。

母の旧友が、新潟県南魚沼で、先の新潟中越地震を体験したそうだ。幸いケガなどはなかったが、車中泊や避難生活で、一番困ったのは、「水」であったという。炊事一つとっても、その苦労は、今回の僕の家の断水なんかとは、比べものにならなかっただろう。母は、その友人と連絡を取り合っていたそうだ。

「今日は、風呂なし」とあきらめかけた八時過ぎ、水道関係者の努力の甲斐があってか、水道が復旧した。ドンと蛇口の奥の方で鈍い音。一瞬蛇口が震えて、ゴゴゴゴーという低い音と共に、少し白っぽい水が落ちてきた。続いて、無色透明ないつもの水。

「母(か)っちゃん、母(か)っちゃん、水出たよう。」

僕は、思わず叫んでしまった。

翌朝、テーブルの上には、ラップを巻いた皿が置かれていた。そのラップ皿に、卵やハムやレタスなどが、普段通り盛りつけてあった。母の目が、笑っている。

「食べたら、ラップをくるっとはがしてね。」

洗面所で、おはようと元気よく流れ出る水。おっと、もったいない。急いで水を止め、歯ブラシとコップ一杯の水を持つ僕がいた。